漢字仮名交じりの表記と書（再考）

森下　弘

序

私たちは日常、漢字仮名交じりで文字、文章を表記している。それは水や空気のようにごく当り前のこととして用いているが、それをあらためて意識し考えてみたい。再考としたのはそのためである。

一　漢字の受容

私たちの祖先は日本語を表記するのに漢字を借用した。四世紀から六世紀にかけて、仏教や政治の体制などと同時に導入した漢字はわが国の文化、生活、そして伝達にも大きな働きをなし、文明の発展をもたらした。

その借用の仕方は、漢語をそのまま用いるとともに、いま一つは、漢字を意味とかかわりなく、表音文字として借用したもので、万葉仮名がそれである。

万葉仮名の草体から発生した、日本独自の仮名でもって「て、に、を、は」、固有名詞、歌などを表記していった。

しかしながら、公用語や抽象的な概念の表現はやはり漢字、漢文が主体で、その大勢は明治初期まで続いた。

明治に入っては、例えば、「瓦斯」「洋燈」のように、漢字の形で新しい言葉や概念を取り入れ、西欧の文明を消化した。

さらに、現代に至っては、情報量が格段に増加し、それを文字で表わすためには漢字が有効で、多くを必要とする、とさえ言える。例えば、イランのクウェート侵攻、併合に対し、「安保理」が無効を決議した、という工合である。国際連合安全保障理事会を縮めたものであるが、ユナイテッドネイションズ、セキュリティ、カウンシル」では長いし、「UNSC」ではまきれやすい。

ちなみに「バイオテクノロジー」「アイデンティティ」など、外来語は片仮名で表記される。

二　漢字仮名交じりの特性

以上見て来たように、私たちは中国伝来の漢字、漢語を使用するとともに、日本人の創造になる仮名を併用することによって日本語を表記してきた。

日本語にある観念的な部分な面、そのいずれをもきちんと表現するには漢字仮名交じり表記でなくてはならなかった。

島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第二十四巻―第二号　二七頁～三〇頁　平成二年十二月

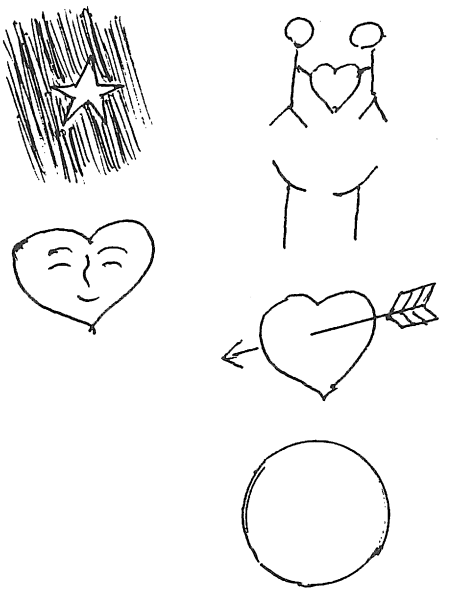


図1

日本人は大きく漢字の恩恵にあずかりながら、しかも中国のように漢字ばかりで思想を表現することをしなかった。

漢字を創造した中国人は偉大であり、又字を初めて創り出すということは大変なことである。例えば「愛」という字を学生に考えてもらったら上図（1）のようないろいろな楽しい発想がうかがえるが、なかなかその思想の深みを表現するのは難かしい。

しかし今日、中国では漢字ばかりで表現しきれないものがあり、困っているともいう。

簡化文字が用いられているが、それは標準音を普及するためのものであったが、その後新しい改革はおこなわれていないという。

例えば「テレビジョン」を中国では「電視台」と書く、学生に考えてもらったところでは、「箱動絵」「電波映像機」「電気画像」「画像見」などがあるが、これはもう「テレビジョン」そのものがいいようである。

日本語の表現に、平仮名以外に片仮名があり、「て、に、を、は」以外に、漢字で表せない擬声語、外来語に用いることが戦後決められている。

漢字仮名交じり、正確には漢字、平仮名、片仮名交じり表記だが、そのいま一つの特長は、漢字だけでなく、それ以外の部分（すなわち仮名）ももとをただせば漢字であるということである。

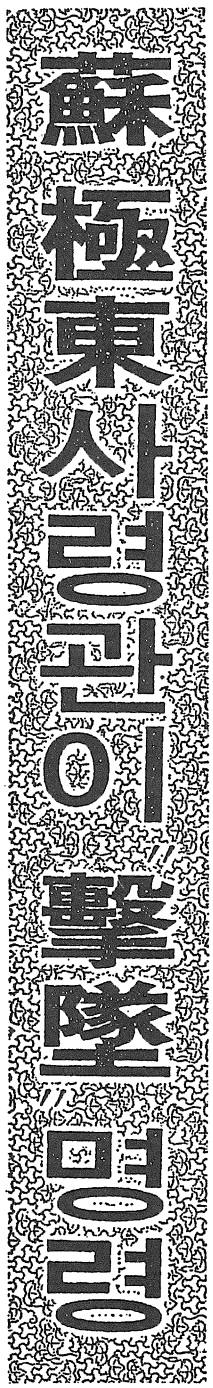
日本と同じく漢字文化圏の、いわゆる朝鮮に、ハングルがある。朝鮮語の七割は漢字であり、教養として漢字が使われているが、十五世紀に作られたハングルが、いま一般に用いられ、若い人では漢字を知らなくなっている者もいると言われる。

そのハングルと漢字（漢語）が日常、漢字仮名交じりのように併用されているが、事情は大変異なる。

次頁の例（図2）は一九八三年の大韓航空機事件を報じた新聞（東亜日報＝韓国）であるが、漢字仮名交じり文のような融合性ではなく、ハングルの中に漢字が浮かんでいるようであり、例えば「”墜落“명명（命令）」「英紙보도（報道）」といったようで、活用部分を体言止めにすると、両者が混在している感じである。

以上のように、漢字仮名交じりの表記法は世界的に見ても特殊なものである。とともにすでに確固としたものになっていて、そう簡単には変化しそうもない。

しかも若い人に限らず、現代の日本人はすでに漢字仮名交じりの世界で生まれ、育っているのだという事実をあらためて思わないわけにはいかない。


蘇極東사령관이 擊墜명령
英紙보도 戰略上요지…裁量權만

【런던=金泰鎬특파원】2백 추물 최종 명령한자는 蘇 는 간부가운데 하나인 極 보로프」인지 같다고 英國 일 보도했다。
69명을 태운 KAL機 격 聯군부내에서 가장 측망받 東亞區사령관「블라디미르 고 의「선데이 타임즈」紙가 4 이 신문은 美국방성보국 (DIA) 측근소식통을을 인용, 「고보로프」가 KAL 極東亞區 機적추물 최종명령한 자로 와의 거

図2

三　漢字仮名交じりの書

漢字を生んだ中国はまた、文字の芸術としての東洋独自の「書」という芸術にまで昇華させた。日本もまた、それを受容するとともに、独自の平安朝仮名の書を生んで今日に至っている。

しかし前項で述べたように、日常の表現、書写はほとんど全てが漢字仮名交じりでなされている。とすれば「漢字仮名交じり」に基づく書表現が志向されるのは当然であろう。

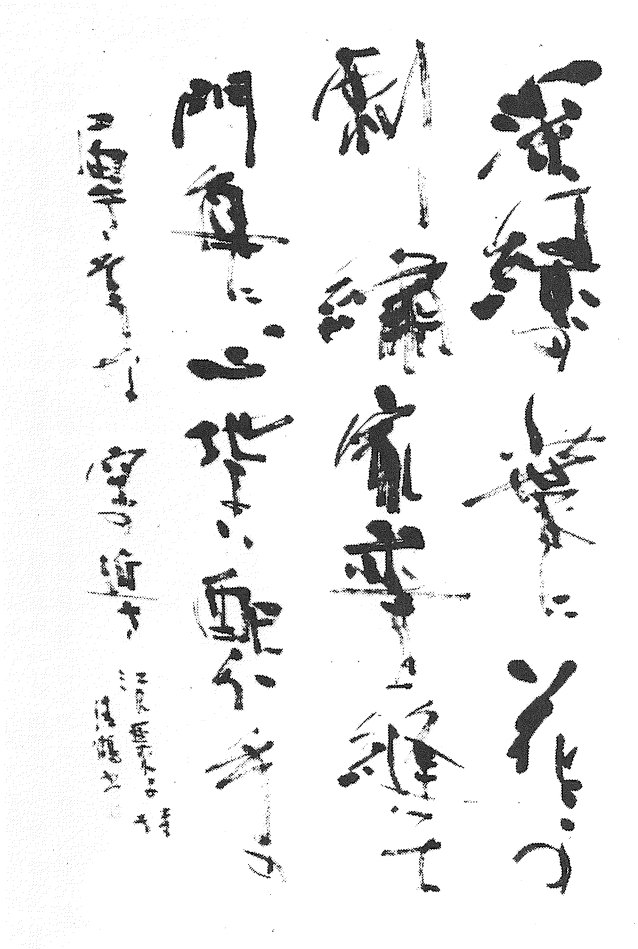
ただそこで問題なのは中国的、大陸的な趣の多い漢字と、優美な仮名とをどう調和させるかということである。

すでに半世紀近く前から試みられたのは平安朝風な優しい仮名にむしろ漢字をこれも優しくして調和させたものであり、いわゆる「調和体」と言う。

ところが戦後、現代に至って、書の素材となる詩や文章に、現代の詩などを書くことが多くなり、また前衛書などの影響もあって、文字造型の表現感覚も現代的なものが要求されるようになり、さまざまな個性的な表現や調和の追求がなされた。「近（現）代詩文書」などと呼ばれるものである。

しかし伝統的な漢字や仮名の書を見慣れた一般の人々にまで、「漢字仮名交じりの書」が浸透し、親しまれるにはまだ時間が要るかもしれない。

ところが、今回の学習指導要領（高等学校芸術科書道）の改訂では、在来の「漢字の書」「仮名の書」と同列に「漢字仮名交じりの書がクローズアップされている。



江良亜来子詩　筆者書

小学校、中学校の国語書写の教材は「漢字仮名交じり」がほとんどであるが、高校では、小、中学校国語書写で扱う漢字、すなわち楷書、行書に調和する仮名による書き方、を基底に、学習、学年の展開に従って、個性的、主体的な「漢字仮名交じりの書」の追求・創造が示唆されている。

現代の日本の独特な漢字仮名交じり表記と、それに基づきながら、国際的な視野の中での日本独自の追求が今日求められている。

参考文献

「漢字」「ことばシリーズ」16（文化庁）一九八六・三月

「韓国の書芸と文字文化」（墨七四号）一九八八・九・一〇月号（芸術新聞社）

「韓国における文字ナショナリズム」（李姸淑）〝しにか〟一九九〇年八月号（大修館書店）

（本稿は一九九〇年八月十二日、島根大学国語学会における講演の概説である。）